

元曉の思想を和諍思想と捉えることに対して

富士慈稔

一、はじめに

元曉の著述とされる『十門和諍論』の断簡が現存している⁽¹⁾こともあり、元曉の思想を和諍思想とする多くの研究⁽²⁾がみられている。しかし、実際には元曉の現存著述中には「和諍」という用語は一例しかみられないのである。それなのに何を以て元曉の根本思想に対して「和諍」という用語を用いるのであろうか、疑問が生ずるところである。勿論、元曉の現存著述を通観するところによると、如何なる立場、または側面から研究を始めても会通・融和思想に辿り着くことは確かなことである。しかし、元曉が自己の思想を会通思想・融合思想と考えていたのか、または強い意志をもって和諍思想と考えていたのかということと共に後世諸師の元曉認識が重要と考えられる。よって、元曉の現存著述の若干の整理と、そして特に後世諸師の元曉著述の引用から、諸師が元曉の思想をどのように捉えたのかを考察するのが本研究である。

二、元曉著述にみられる和諍・会通

(一) 和諍の用例

元曉の思想を和諍思想と捉えることに対して

和諍思想の源流に関しては既に先学によつて指摘されているように「善和諍訟」・「調和諍訟」・「樂和諍訟」として僧侶間の諍いを調停する意味の「和諍」として漢訳経論で若干数みられるものである。また旧訳・新訳經典共にみられ、また元曉以前の僧肇、吉蔵、道宣等の章疏にもみられることから、元曉がそれ等からどのような示唆を受けたのか、また『十門和諍論』でどのような論争を十門の名目を立てて調停しようとしたのかは、これもまた先学によつて指摘されてはいるが、しかし、現存部分からは一部を窺うことしかできない。ともあれ「和諍」を冠する『十門和諍論』ではあるが現存部分から「和諍」の語を見出すことはできない。唯一「和諍」という語がみられるのは『涅槃宗要』で『涅槃經』での論点を四門に区分した次の一文である。

第六四徳分別略有四門。一顕相門。二立意門。三差別門。四和諍門（大正三八―二四五中）
 ここで第四に「和諍」門を挙げ

次第四明和相諍論。諍論之興乃有多端。而於当偏起異諍法身常住化身起滅（以下略）（大正三八―二四七下―二四九上）として以下に、仏に対する常住説と生滅・無常説が互いに道理あつて矛盾しないことを論じているのがみられている。ともかく「和諍」という語がみられるのは右の一例だけである。

(二) 会通の用例

「和諍」に対して近似する意味あいだ漢訳経論で見られるのが「会通」である。特に經典よりも章疏中で、諸説の間に相通じる趣意を以て融和させる意味の「会通」、相違・矛盾している諸々の教え及び説を「和会」し「疎通」する意味の「会通」としての使用例が多くみられる。元曉の著述でも、

如摂論説。三性相望。不異非不異。応如是説。若能解此三性不一不異義者。百家之諍。無所不和也

（大正四四―二二七下）

として「不一不異義」を解することができれば百家の論争も「無所不和」と明言する『起信論別記』で

若不爾者。如不曾見。不応憶念。此中經說云。不自見如是。相違云何會通。答此有異意。欲不相違。何者。此經論意。欲明離見分外無別相分。相分現無所見。亦不可說即此見分反見見分。非二用故外向起故

(大正四四—二三六中)

右のような用例がみられ、また『起信論疏』でも右の一文をさして「此中釈難會通新古。如別記中塵分別也」(大正四四—二一四中)とする用例と

第三顯其發心功德。於中有四。初顯勝德。次明微過。三通權教。四歎實行(大正四四—二〇中)

として第三に「通權教」を挙げ、その解釈で「第三會通權教。如本業經云」と続ける用例がみられている。

また「和諍」引用例もみられる冒頭で「統衆典之部分歸万流之二味開仏意之至公和百家之異諍」(大正三八—三九上)と述べ、結論部分で五時判と四宗判に代表される南北の得失を論じながらも全てを融和させようとする『涅槃宗要』では

1 故彼不能會通此文(大正三八—二四五中)

2 仏性之義六門分別。一 出體門。二 因果門。三 見性門。四 有無門。五 三世門。六 會通門(同—二四九上)

3 第六會通。於中有二。初通文異。後會義同。通異文者。問如因果門所引文云(以下略)(同—二五三上)

4 何故師子吼中言。正因者名為仏性。緣因者發菩提心。如是相違云何會通。通者解云(以下略)(同—二五三上中)

5 又復迦葉品中說云。或云仏性住五陰中果(略)。如是相違云何會通。通者解云(以下略)(同—二五三中)

6 又師子吼中言(略)。如是等文云何會通。通者解云。通相而言(以下略)(同—二五三中)

右のように仏性義の六門分別の第六に「會通門」として挙げているのを含めて六例の「會通」の用例がみられる。

元曉の思想を和諍思想と捉えることに対して

(二)元曉の会通・融和思想

更に直接「和諍」及び「会通」の語を用いずとも、相違・矛盾している教え及び説を「二師所説皆有道理」・「二説皆有道理」として「和会」し「疎通」する融和的な言及、または「有道理」として全てを認めようとする言及が次のような著述にみられている。

『起信論別記』

- 1 問雖無相違。而有不同。不同之意。可得而聞乎。答不同之意。各有道理（大正四四―三三五下）
- 2 二師所説皆有道理。皆依聖教之所説故（同―三三九上）

『大慧度経宗要』

- 1 問曰上種種人説波若波羅蜜何者為実。答曰有人言各有各有理皆是実故。如経説五百比丘各各説二辺及中道義。仏言皆有道理（大正三三―七〇上）

2 第四義者唯顕地上無分別智。證会実相絶諸戲論超過四句遠離五相。故言末後答者為実。是就最勝作如是説。而非尽撰一切智慧。故言諸説皆有道理（同―七〇上）

- 3 問是二師説何者為実。答二種教門三種法輪是就一途亦有道理（同―七三中）

『法華宗要』

1 是故説無是方便語。由是道理対法論説為方便者。亦有道理也（大正三四―八七五下）

『起信論疏』

- 1 今此文中。非有相。是遣初句。非無相者。遣第二句。非非有相非非無相者。遣第四句。非有無俱者。遣第三句。二句前後。隨論者意。皆有道理（大正四四―二〇八上）
- 2 二師所説皆有道理。皆依聖典之所説故。初師所説得瑜伽意。後師義者得起信意（同―二二七上）

3 今此論中。凡夫二乘所見六道差別之相。名為心身。十解已上菩薩所見離分齊色。名為報身。所以如是有不同者。法門無量。非唯一途。故隨所施設。皆有道理（同―二一九上）

『金剛三昧經論』

1 問余処説有三無性觀。何故此中但説二無。答無相無生合為一辺。所遣相生同是有故。又此二觀皆有尋思。遣無性時無尋思故。或開或合皆有道理故。已説方便次顯正觀（大正三四―九六五中）

2 又此一覺有本始義。以有本覺顯成義故。真修之説亦有道理。以有始覺修成義故。新修之談亦有道理。如其偏執即有未足。且止乘論還積本文広無相觀竟在於前（同―九六五下）

3 問如衆縁有故生。亦衆縁有故滅耶。答衆縁有故生。生已自然滅。如是相違云何和會。解云。因縁道理如彼論説。唯識道理如此經説。所以二説皆有道理（同―九九八下）

『涅槃宗要』

1 根大乘論云。三身所顯無上菩提。既説三身皆是菩提。當知皆為大涅槃體。如是二説皆有道理

（大正三八―二四二上）

2 如來之身非身是身無識是識離心亦不離心無処亦無宅亦宅非像非相諸相莊嚴乃至説広。當知如來秘藏法門説有説無皆有道理（同―二四五中）

3 問二師所説何得何失。答或有説者皆得皆失。所以然者。若決定執一辺皆有過失。如其無障礙説俱有道理（同―二四八中）

4 問者是經文有是有非。即応二別不就一徳。有是三世者化身色形是。有非三世者報仏内徳是。亦如是二義灼然可見。何勞宜就美徳而作難解之説。答如汝所見亦有道理。為新學者応作是説。若非新學無定執者為是等人応如前説。為顯是義故（同―二五二下―二五三上）

元曉の思想を和諍思想と捉えることに對して

『無量壽經宗要』

1 二師所說皆有道理。等有經論。不可違故。如來法門無障礙故（大正三七—二六下）

2 問如是二說。何得何失。答曰。如若言取。但不成立。以義會之。皆有道理（同—二七中）

右のように『起信論別記』二例、『大慧度經宗要』三例、『法華宗要』一例、『起信論疏』三例、『金剛三昧經論』四例、『涅槃宗要』四例、『無量壽經宗要』二例、以上の用例がみられている。特に「有道理」の理由としての『起信論別記』と『起信論疏』にみられる「皆依聖教之所說故」という一文と、『大慧度經宗要』にみられる「仏言皆有道理」という一文に元曉の諸教諸說融和の根拠が窺われる。

これ等以外にも元曉の著述中には「通曰」等の用例や、「皆」・「悉」等の語を用いての融和的な一文が多々みられるため、元曉の思想を会通・融合思想とするのには異論がないところである。

但し、ここで「和諍」に関していうならば、他人の持戒の是非について批判することを戒め、有・無の二見に対する執着から離れなければ戒相を如実に知ることは出来ない、と説く完本現存の『菩薩戒本持犯要記』の

第二愚者。然仏道広蕩。無礙無方。永無所拋。而無不當。故曰。一切他義。咸是仏義。百家之說。無所不是。八万法門。皆可入理。而彼自少聞。專其様狹見（大正四五—九一九下）

右のように、百家の説は皆それぞれ仏義を以て説くために道理があるのに全てを知らずに一つの狭見に拘るのは愚者である、とする一文と

『本業經疏』の

七無上士者。涅槃經言。上士者名之為斷。無所斷者。名無上士。諸仏世尊無有煩惱。故無所斷。是故号仏為無上士。又上士者名為諍訟。無上士者無有諍訟。如來無諍。是故号仏為無上士（韓仏全—一五二六上）

諍訟がない無諍なのは如來、だけである、とする一文である。この二つの文からは、百家の説には道理はあるが実は

如来以外の全ての聖人・先師（百家）には諍訟がある、とする認識が元曉にあつたことが窺われるのである。

以上からすると相違・矛盾している諸々の教え及び説を融合する際に、「会通」、または「有道理」・「通曰」等の語を用いて、全ての諍いを調停する「和諍」という語義の強さが感じられる語を、何故に著述中に一例しか用いずに、『十門和諍論』として書名に冠したのかという疑問が生じてくる。勿論、元曉の現存書は二二部しかなく、また『十門和諍論』の現存が一部分であるために生ずる問題で、全て現存していれば問題とならないことなのかもしれないが、ともあれ後世の諸師が元曉の思想を「和諍」と捉えたのか「会通」と捉えたのか、諸師の引用から考えてみることにしたい。

三、諸師の元曉章疏の引用にみる元曉思想認識

(一) 中国諸師の場合

概観するところによると中国諸師で元曉の章疏を引くものは一九師である。その一九師の元曉章疏の引用から元曉の思想を「会通」・「融和」、または「和諍」と捉えた師を見出すことは困難である。先学の研究と諸師の章疏引用の整理を合してみると、先ず元曉章疏を引用する諸師が一〇師の華嚴宗の場合、元曉の影響が大きいとされる法蔵（六四三―七二二）であるが、法蔵が元曉の名を明記して引用するものは『探玄記』『第三明立教差別』での一例のみである。その引用箇所からは元曉の「会通」等の思想を窺うことはできない。『起信論義記』や『華嚴五教章』への元曉章疏の影響に関する研究や、元曉の『十門和諍論』の空有の会通の思想と『華嚴五教章』『三性同異義』、または『十門和諍論』の仏性論と『華嚴五教章』の種性差別の七難七答との関係に言及する研究もあり、それ等から法蔵における元曉章疏の存在の大きさが窺われるのであるが、法蔵が元曉の章疏を参照していたとしても明確に引用箇所を指摘できず、法蔵が元曉の思想を会通・融和思想と捉えたかを明らかにすることは困難である。

元曉の思想を和諍思想と捉えることに対して

李通玄の場合も元曉引用は『新華嚴經論』に一例みられるが、この引用は李通玄自身いうように『探玄記』からの孫引きである。彼の一乘思想が元曉の「和諍」の一乘思想に近いともされるが、元曉の引用が法蔵の孫引きということと、他に元曉との関連がみられないことから、李通玄が元曉の著述を直接的に紐解き、元曉の会通思想から影響を受けたとするのは難しい。

慧苑（六七三〜七四三頃）の元曉引用は『刊定記』『第三立教差別』に二例みられ、一例は『探玄記』と同箇所引用であるが独自の引文があることから法蔵からの孫引きではなく直接に『華嚴經疏』を引いたことが窺われる。しかし、他の一例で元曉の三乗別教の区分を批判しているのがみられ、慧苑に元曉思想の影響を探ることは困難である。

澄観（七三八〜八三九）の元曉引用は『大方広仏華嚴經疏』に一例、『七処九会頌积章』に二例、『演義鈔』に八例みられている。特に『宋高僧伝』での「釈澄観。姓夏侯氏。越州山陰人也（省略）。大曆中就瓦棺寺伝起信涅槃。又於淮南法蔵。受海東起信疏義」として、法蔵から元曉の『起信論疏』を学んだという記録がある。勿論これは、法蔵没後に澄観が生まれているため不可能であり、よって『新修科分六学僧伝』では「唐澄観（略）大曆中。伝起信涅槃於瓦官寺。受東海起信疏義於淮南」として「法蔵」の名を消している。しかし、これ等の記録からも澄観が元曉の『起信論疏』を重用していたという認識が中国にあったことが窺われるのである。但し、一一例の引用中で元曉の華嚴関係章疏からの引用が六例で、『起信論疏』からの引用もあるが、そこには元曉の会通・融和的な言及の引用はみられず、元曉の思想を「会通」等と捉えていたかを知ることができない。

但し、宗密（七八〇〜八四一）に関しては、宗密の『起信論疏註』には元曉の名及び章疏名は記していないが八例の『起信論疏』からの引用がみられている。また清代の詠震や江戸時代の義諦により『円覚経略疏』での『起信論疏』の引用も指摘されている。『円覚経略疏』の引用は確認できないが、『起信論疏註』の引用は殆どが法蔵の『起信論義記』の引用に続いて引かれるものである。そこに元曉の会通・融和的な文の引用はみられない。しかし、『原人論』に

は儒・佛・道三教の根本的一致を説く会通的立場が窺われ、教禪一致を説く『禪源諸詮都序』にも儒道二教をも視野に入れた、そして華嚴思想だけでなく佛教の諸思想のそれぞれの思想的意義を尊重して諸教諸思想を融合しようとする立場が窺われるとされ、その立場は華嚴至上主義に立つ法蔵・澄観とは異なり、どちらかといえば元曉の立場に近いものがあるとされる。とすれば、宗密が元曉の『起信論疏』を引用する過程で元曉の思想の特徴を会通・融和思想と捉えた可能性が考えられる。

その他の華嚴宗諸師では、一二世紀頃の鮮演の『華嚴經談玄決扱』、観復の『華嚴演義鈔会解記』、師会の『般若心経略疏連珠記』の引用からは元曉の思想をどのように捉えたのか知ることはできないが、華嚴と密教との合一を意図したとされる一二世紀初頭の志福の『釈摩訶衍論通玄鈔』には『起信論疏』の「皆有道理」とする会通解釈の箇所がそのまま引用されている。

その他の諸宗諸師九師の中で注目されるのが、その禪淨一致の思想がその後の念仏禪の発展を促したとされる延寿（九〇四〜九七五）である。元曉章疏の引用は『宗鏡録』で九例、『万善同帰集』で一例みられており、特に『宗鏡録』では現行の『十門和諍論』にみられない一文であるが『十門和諍論』からの引用がみられている。二書共に『起信論疏』や『金剛三昧經論』の引用では先に挙げたような元曉の会通解釈の箇所は引用していないが、

1 金剛三昧論云。平等一味故。聖人所不能異也。有通有別故。聖人所不能同也。不能同者。即同於異。不能異者。即異於同（大正四八―八七二下）

2 金剛三昧論云。一切心相本來無本。本無本処。空寂無生。若心無生即入空寂。空寂心地即得心空。善男子。無相之心無心無我。一切法相亦復如是者。一切心相種子為本。求此本種永無所得。若是現在則与果俱。無本末異。如牛兩角。若已過去則無作因。無体性故。猶如兔角。如是道理本來法爾。故言本來無本。又生滅心生必依本処。本処既無則不得生。当知心相本來無生。故言空寂無生。所入空寂即是一心。一切所依名之為地。故言即入空寂

元曉の思想を和諍思想と捉えることに對して

3 金剛三昧論云。真俗無二而不守一。由無二故則是一心。不守一故挙体為二（同―九七三七）

右のように元曉の会通・融和的な一文を引いているのである。また元曉の章疏を引く中国諸師の中で唯一『十門和諍論』の書名を明記して引くのが延寿である。

以上から、宗密に関しては元曉の名を明記しての引用でないために考察の必要があるが、延寿が中国諸師の中で初めて、そして唯一『十門和諍論』を明記して引き、鮮演は元曉の会通解釈の一文を引いている。興味深いのは会通思想家と考えられている三師が共に元曉の章疏を引いていることである。元曉の思想的影響を受けたとは少ない引用例からは短絡的にはいえないが、しかし三師の思想的立場と元曉の思想が「会通」ということでは近似していることは事実である。但し、ここで元曉と「和諍」との接点は『十門和諍論』という著述にしか見出すことはできない。

（二） 韓国の諸師の場合

元曉章疏の引用が確認される韓国の一五師の中で、元曉の会通思想を認識していた可能性が僅かでもあると考えられる諸師は表員・大賢・見登・均如の四師である。

表員の場合は『華嚴經文義要決問答』に元曉の引用が二三例みられ、その中に『法華宗要』からの融和的な箇所¹⁰の引用が一例みられている。しかし、『要決問答』の元曉引用で典拠が分明なのは『法華宗要』からの二例のみで、他の二一例の典拠は不明である。法蔵の説を挙げて次に元曉の説を紹介する例や法蔵説と元曉説を同一説として引く他の引用例¹¹だけでは、元曉の思想を会通思想として捉えていたとするには例証が少なすぎるようである。

大賢の場合は『成唯識論学記』と『起信論内儀略探記』に元曉の会通的言及の引用がみられ、『成唯識論学記』では元曉章疏からの引用ではないが、清弁と護法の空有の論争に続き「元曉師等。語諍意同」（韓国仏教全書三一四八四上）

として、元曉の名を引く一文がみられている。これは元曉の会通思想を念頭に置いての引用とも考えられる。更に『略探記』では元曉の名を出していないが『起信論疏』の会通的一文「二師所説皆有道理。皆依聖教」(大正四四—四一八上)として引いているのがみられる。大賢が元曉の何を最も重んじたのかということに関しては、大賢が『略探記』で元曉の和諍的な言葉だけを引用している、という興味深い見解もある。『略探記』で和諍的な言葉だけ引用したかどうかは別にして、大賢が元曉の会通思想を念頭に置いていた可能性は『成唯識論学記』で窺われ、また『起信論疏』の引用例からも大賢が元曉の会通思想に注目していたとも考えられるが、現段階では推論にすぎない。

見登の場合、『大乘起信論同異略集』に関しては見登の撰述書でも手を加えたものでもなく、日本の智憬の撰述とする論稿が発表されている。しかし、若干の疑問があるため本稿では便宜上、従来通り新羅見登の撰述書とした。さて本書は『大乘起信論』と『成唯識論』との同異を法蔵と元曉の説を中心に論じたもので、元曉章疏の引用が一九例みられている。その中で注目すべき引用が

- 1 丘龍和諍論云。夫仏地万徳略有二門。若従因生起之門報仏功德利那生滅(以下略)(韓仏全三一六九五上)
- 2 丘龍云爾集者云。若如唯識宗。其正体智雖不作境。而還證自性(略)設微釈難具和諍論(同三一六九六上中)
- 3 具如香象教分記及丘龍十門和諍論見之(同三一七〇七中)

4 丘龍和会報化身経論異説。云如同性経説。穢土成仏名爲化身(以下略)(同三一七二二上)

右の四例の引用である。1・2は『十門和諍論』からの引用とされるが現存部分にはみられない一文である。また3に法蔵の著述と共に『十門和諍論』の書名を挙げ、4では元曉が仏身に対しての異説を「和会」・会通しているとの言及もみられ、元曉の『十門和諍論』と会通思想に対する認識が窺われる。

元曉の思想を和諍思想と捉えることに対して

最後に均如であるが、均如(九二三〜九七四)の元曉章疏の引用は『乘法界図円通記』・『釈華嚴旨帰章円通鈔』・『華嚴三宝章円通記』・『釈華嚴教分記円通鈔』の四書にみられるが、その中で元曉の会通思想に関連する引用が『釈華嚴教分記円通鈔』での三八例の引用の中に七例みられている。

- 1 曉公云。五性差別之教。是依持門。皆有仏性之説。是縁起門如是会通両家之諍(韓仏全四―三二二下)
 - 2 曉公和諍論。引三師説。問諸師所説。何非何是(以下略)(同四―三二五上中)
 - 3 宗要云。第二明仏性之義。六門分別。一出体門。乃至六会通門(以下略)(同四―三三四下〜三二五上)
 - 4 和諍論云。問一切衆生。皆有仏性耶。当言亦有無性有情耶。答又有説者(以下略)(同四―三二五中下)
 - 5 和諍論中。通依諸經論。説其二門(同四―三二五下)
 - 6 和諍論中。依瑜伽現揚等。立依持門。依涅槃等經。立縁起門(以下略)(同四―三二六上)
 - 7 和諍論中。猶如巨海。起波浪者。其巨海則喻真如仏性故。其所論仏性義(以下略)(同四―三二六上)
- 1は典拠不明であるが「会通両家之諍」とする元曉の会通的言及がみられ、3は『涅槃宗要』で「会通」の語がみられる箇所に引用である。その他は現存断簡にはみられない一文であるが『十門和諍論』からの五例の引用である。この引用中にみられる「和諍」は全て『十門和諍論』という著述を指すもので、元曉の語としての、または元曉の思想を指す意味の「和諍」はみられない。唯一みられるのは「会通」である。
- 以上から韓国の諸師の中で『十門和諍論』を引きながら元曉の思想を「会通」と捉えた可能性のあるのは見登と均如の二師となり、もし『同異略集』が智憬の著述とすれば均如ただ一師となるのである。

(三) 日本の諸師の場合

日本で元曉章疏の引用を確認できる諸師は六四師である。その中で元曉の思想を会通思想と捉えた可能性のある諸

師を宗派別に区分し、華嚴宗一五師中の五師、三論宗七師中の二師、天台宗一一師中の三師、計一〇師を挙げてみる
こととする。

先ず、華嚴宗で最初期に元曉の章疏を引用したのが寿靈（く七五七く九一）である。法蔵の『五教章』を註釈した『華嚴五教章指事』には二一例の元曉章疏からの引用がみられる。その引用中五例が『法華宗要』からの引用で、その中に元曉の会通的解釈の一文がみられ、また「無明所動阿頼」に関する『起信論別記』での会通的表現の引用がみられる。

聖詮（く二一九く）の『華嚴五教章深意鈔』には元曉の引用が五例みられるが、その中で『五教章』での空有の諍論に対して「相成非相破」（大正四五―五〇―一七）とするのを解釈した後で、それを補足するように

青丘曉公造和諍十門之論。会空有諍論。（大正七三―三下）

として元曉が『十門和諍論』で空有の諍論を会していると引き、「又此心也論師各依一門立其義故。斥一門興自義也。自非尽相徹性者。空有二門難顯示故也」と続け、それを「無失」として結んでいるのがみられている。但し引用の箇所は現存の『十門和諍論』にはみられない。恐らくは『十門和諍論』の意を纏めて出したものと思われる。また次のように

元曉師釈仁王三性云。習種性者。前十千劫習信心。信心成就得仏種性。從因立名。名習種性（以下略）

（大正七三―七上中）

右の一文を『華嚴五教章指事』（大正七二―二五七下く二五八上）から引き、『五教章』で「発心」を以て二種の「性習二性」を「和合」させていると続けているのがみられる。この一文の前にも『指事』の元曉引用を三例引いているのであるが、この箇所での元曉引用の必然性は感じられない。それでも元曉を引用したということは、法蔵の「和合」が元曉の「会通」と何らかの関わりがあると言うことを暗に示そうとしたとも考えられる。

元曉の思想を和諍思想と捉えることに對して

明恵（一一七三〜一二三三）は六部で元曉章疏の引用がみられるが、『金師子章光顯鈔』に『十門和諍論』の引用が次のように一例みられ

和諍論云。不可以有限心。測量無限之法。起増減見。墮闍提綱。如経言若有四部。若起増見。若起減見。諸仏如来非彼世尊。如是等人。非我弟子。此人以起二見因縁。從冥入冥。從闇入闇。我説是人。名一闍提

（大日本仏教全書一三一—二〇七上）

また『於一向専修宗選択集中摧邪輪』にも撰者問題がある『遊心安楽道』の会通的一文が引かれている。明恵の著述の中で引く元曉の章疏は『遊心安楽道』が主であり、元曉の全ての章疏を紐解いたようには考えられないが、しかし、『華嚴祖師絵伝』や『光明真言土砂勸信記』にみられる「仏法ノ棟梁」・「世界ノ日月」という元曉への傾倒と、一例のみの特異な『十門和諍論』の引用から元曉の思想を明恵なりに把握していたことは考えられる。但し、それが会通思想とは断定はできない。

順高（一二二四〜六一）の『起信論本疏聴集記』には元曉章疏の引用が六〇例みられ、『大慧度経宗要』・『起信論別記』・『起信論疏』の会通的言及箇所引用がみられると共に、次のように『十門和諍論』の名が引かれている。

元曉和諍論制作。陳那門徒唐土来有滅後取彼論帰天竺国了是陳那末弟歟。云云私云元曉事抄第五二引シナリ会解記第六説（大日本仏教全書九二—一〇三上）

また『五教章類集記』（巻二五—二七四丁）にも「元曉陳那菩薩後身説」一例と和諍論の引用が四例みられている。但し、引用にみられる「和諍」はあくまでも『十門和諍論』という著述を指すものでそれ以外には用いられていない。

凝然（一二四〇〜一三二二）の元曉引用は九部の著述にみられ、一四部程の元曉章疏の引用が確認できる。その中で『五教章通路記』に元曉の『法華宗要』での会通的解釈がみられるほかに、

1 第三和会丘龍正義。初義賢首始教所説。第二第三。並当終教。此是丘龍頭了門説（大正七—一四五九中）

2 即是賢首元曉兩師。一段問答。和会二論（以下略）（同―五四四上）

3 元曉大師会云。若依二障門。此禪定障。所知障攝（以下略）（同―五六八下）

4 元曉大師。和諍論。楞伽宗要。具举定性迴不迴義。互致破立（以下略）（同―六〇八下）

右のように元曉に付随して「和会」という語を用いていることと、「元曉大師会云」という表現と、『十門和諍論』からの一文ではなく、『楞伽經宗要』と共に『十門和諍論』の書名のみを出していることが注目される。

三論宗では玄叡（く八二九く）の『大乘三論大義鈔』に元曉引用が三例みられている。その中に空有二徒の諍論に対して元曉の諍論の無い立場を好として言及している一文がある。大賢が『成唯識論学記』⁽¹³⁾で元曉章疏を引いているところを玄叡が整理したものとも考えられるが、玄叡が独自に元曉の立場を「無諍」と捉えたものとも考えられる。次に珍海（一〇九く―一五二）の『三論玄疏文義要』でも次のように元曉引用がみられる。

新羅元曉。十門和諍論。会通依地空不空（大正七〇―二三四中）

『十門和諍論』からの直接の引用ではなく、『十門和諍論』の要旨を述べた一文であるが、ここで『十門和諍論』の書名と「会通」の語がみられるのである。

最後に天台宗の引用であるが、天台宗では先ず最澄（七六七く八二二）の『依憑天台集（依憑集）』に次のように『涅槃宗要』（大正三八―二五五下）の会通的解釈を引いているのがみられる。

新羅国華嚴宗沙門元曉贊天台德證諸宗教時。其涅槃宗要末云。又如隋時天台智者。問神人言。此土四宗。会經意不。神人答言。失多得少。又問。成実論師。立五時教。称仏意不。神人答曰。少勝四宗。猶多過失。然天台智者。智慧俱通。举世所重。凡聖難測。是知仏意深遠無限。而欲以四宗科於經旨。亦判五時。限於仏意。是猶以螺酌海。用管闡天者耳。教迹淺深。略判如是（伝教大師全集三―三五八）

また蓮剛（八一五く八〇頃）の『定宗論』でも『依憑天台集（依憑集）』を参照して

元曉の思想を和諍思想と捉えることに對して

華嚴宗元曉師云。此土四宗。猶以螺酌海。成実五時。如用管闍天。天台智者。禪慧俱通。凡聖難測

(大正七四—三一九下)

右の一文を引用している。これ等は元曉の会通思想云々ではなく、華嚴宗の師ではあるが天台の宗義に賛意を示している人物として捉えて天台宗義の根拠として引いたものである。

しかし天台宗の中で元曉の章疏を独自に手にしていた安然(八四一頃)の『真言宗教時義』には

元曉師約諸宗諍作和諍論云。諸宗所執皆得仏意(大正七五—四〇〇下)

右のように現行本にはみられない『十門和諍論』からの、そして『十門和諍論』の大意を示す一文が引かれている。またこの一文に続き「後義栄師作難和諍論云。判権為権判実爲実是有道理。而言皆得仏意は無道理」として百済義榮の『難和諍論』での元曉の批判を引き、義栄説を退け「故異元曉和諍不墮義栄所難」(大正七五—四〇〇下)としているのがみられているのである。

以上から日本の諸師で元曉の思想を「会通」と捉えた諸師を、最澄と蓮剛を除いて年代順に並べると「寿靈・玄叡・安然・珍海・聖詮・明恵・順高・凝然」の順となり、安然の頃から『十門和諍論』の引用がみられるようになったこと、そして『十門和諍論』の引用を行つていても元曉の一文に付すのは「和諍」ではなく「会通」・「会」または「和合」という語であることが知られるのである。

四、結語にかえて

さて、元曉の思想を和諍思想とするのが定説のようになってきているものの、元曉の現存著述中では「和諍」の用例が一例のみで、用例としては「和会」し「疎通」する意味の「会通」が多くみられること、また直接に「会通」を用いていなくとも「有道理」・「通曰」や「皆」・「悉」等の語を用いる融和的な一文が多いことを確認し、諸師の元曉章疏

の引用例からは三国の諸師で元暁に付して「会通」の語を用いる諸師の存在や『十門和諍論』を引く諸師の存在と、「和諍」を用いる場合は全て『十門和諍論』を指すこと等を確認してみた。

ここで元暁の思想が和諍思想と捉えられる要因としては、筆者としては「和諍篇」（『円宗文類』韓仏全四一六三四上）とする詩で元暁の『十門和諍論』を讃え、「祭芬皇寺暁聖文」（『大覚国師文集』韓仏全四一五五五上中）で百家の異諍を和す「我海東菩薩」として元暁を賞讃する義天（一〇五五—一〇一〇）の存在と、その義天の元暁認識を承けて追諡された「和諍国師」号の存在にあるものと考えている。義天の元暁認識と「和諍」と「和静」の関係、及び「和静国師」と追号された当時の時代背景等に関しては稿を改めて考えてみたい。

(1) 『十門和諍論』の断簡に対する研究は日本では鎌田茂雄氏「十門和諍論の思想史的意義」（『仏教学』一一、仏教学研究会、一九八一年）、韓国では趙明基氏「元暁大師の十門和諍論研究」（『金剛杵』二二、一九四二年）等がある。

(2) 概観するだけでも、元暁の儒教と老荘思想に対する態度から和諍思想の特質と成立事情を論じた石井公成氏「元暁と中国思想」（『印度学仏教学研究』三二—二、一九八三年）、元暁の和諍思想と『楞伽経』との関係を指摘する同氏「元暁の和諍思想の源流—『楞伽経』との関連を中心として」（『印度学仏教学研究』五一—二、二〇〇二年）、元暁の和諍思想を元暁の華嚴思想に求めようとする全海任氏「元暁の和諍原理—華嚴一心について—」（『印度学仏教学研究』四八—一、一九九九年）、元暁が「無二に偏らず不守一に傾かない無二而不守一」という思想構造を『金剛三昧経』の根本思想と捉えただけではなく、それが元暁の和諍思想の成立根拠となったとする佐藤繁樹氏「元暁の『金剛三昧経論』に於ける論理構造の特色—無二而不守一思想—」（『印度学仏教学研究』四二—二、一九九四年）、韓国でも趙明基氏「元暁の和諍」（『新羅仏教の理念と歴史』、新太陽社、一九六二年）、李鐘益氏「元暁の根本思想—十門和諍論研究—」（『東方思想個人論文集』一、東方思想研究院、一九七七年）、イハンスン氏「元暁思想研究—和諍思想を中心として—」（『論文集』六、陸軍士官学校、一九七七年）、金雲学氏「元暁の和諍思想」（『仏

元暁の思想を和諍思想と捉えることに対して

『教学報』一五、東国大学校仏教文化研究所、一九七八年、李永子氏「元曉の会通思想研究」（『論文集』人文社會篇二〇、東国大学校、一九八一年）、金善根氏「元曉の和諍論小考」（『論文集』二、東国大学校、一九八三年）、崔裕鎮「元曉の和諍思想研究十門和諍論」（『民族仏教』二、一九九二年）等、「十門和諍論」に対する論稿だけではなく元曉の現存の著述を通して元曉の和諍思想を探ろうとする論稿が多い。

(3) 前掲石井公成氏「元曉の和諍思想の源流―『楞伽經』との関連を中心として―」

(4) 僧肇『注維摩詰經』（大正三八―三三六下）、吉藏『維摩經義疏』（大正三八―九二九下）、道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』

（大正四〇―一四上）等

(5) 鎌田茂雄氏「十門和諍論の思想史的意義」（『仏教学』一一、仏教学研究会、一九八一年）

(6) 韓国仏教全書編纂委員会が註で記しているように『韓国仏教全書』本（第一冊―八三八）の「十門論者」以下「艶融聊為序述名曰十門和諍論」までは、八世紀末または九世紀初頭建碑の『新羅誓幢和尚塔碑』からの抜粋であり本来の断簡にはみられない記事である。

(7) 柏木弘雄氏「起信論註釈書の系譜」（『印度学仏教学研究』一七―二、一九六九年）、吉津宜英氏「法藏の大乗起信論義記について」（『印度学仏教学研究』二九―一、一九八〇年）、同氏「華嚴一乘思想の研究」（大東出版社、一九九一年）

(8) 鎌田茂雄氏前掲論稿

(9) 吉津宜英氏「華嚴一乘思想の研究」（大東出版社、一九九二年、四七〇頁）

(10) 元曉師云。所言乗者。略説有二。謂能乘人及所乘法。謂三乘行人。四種声聞乃至元性有情。並是能乘人。以皆有仏性故（韓仏全二―三八〇下―三八一上）。この引用は若干の不同と簡略化がみられている。『法華宗要』の該当箇所は次のようである。

一乘実相略説有二。謂能乘人及所乘法。此經所説一乘人者。三乘行人。四種声聞。三界所有四生衆生。並是能乘一仏乘人。皆為仏子。悉是菩薩。以皆有仏性当紹仏位故（大正三四―八七一上、韓仏全一―四八八上）

(11) 高翊晋氏『韓国古代仏教思想史』(韓国・東国大出版部、一九八九年、三五二頁)。これに対しては方仁氏『太賢の唯識哲学研究』(ソウル大学校大学院哲学博士学位請求論文、一九九五年、三三頁)、及び朴太源氏(「見登の起信論観」『伽山學報』伽山仏教文化研究院、創刊号、一九九一年、二五三頁)から反論が唱えられている。

(12) この一文は現存の『十門和諍論』にはみられないが、元曉の『無量寿経宗要』(大正三七―二九中)に近似する一文である。

(13) 有説。此二語諍意同。如諍浮図下龜上細。語諍意同。為今末代鈍根之徒。依此諍論。巧生解故。元曉師等伝如是説

(大正七〇―一五三中)

(14) 大賢『成唯識論学記』(韓仏全三三四八四上)

*尚、中国・韓国・日本諸師の元曉引用に関しては拙著『新羅元曉研究』(大東出版、二〇〇四年二月)を参照されたい。

(15) 「八月癸巳詔曰。元曉義相東方聖人也。無碑記。諡号。厥德不暴。朕甚悼之。其贈元曉大聖和靜国師。義相大聖圓教国師。有司即所住処。立石起徳。以垂無窮」(『高麗史』卷第十一肅宗六年条、肅宗六年(一一〇二)に元曉と義相(義湘)に碑がないことを遺憾とし、元曉に「和靜国師」、義相に「円教国師」と追諡し石碑を建てるとする記事である。

元曉の思想を和諍思想と捉えることに對して